

不安・淋しさを訴える入居者 への対応

一人の入居者を通して
ケアの在り方を考える

痴呆性高齢者グループホーム つつじの夢



平成12年7月開設

介護老人保健施設アゼリアに併設

定員:1ユニット 6名

職員配置:常勤スタッフ 5名

外出時の風景



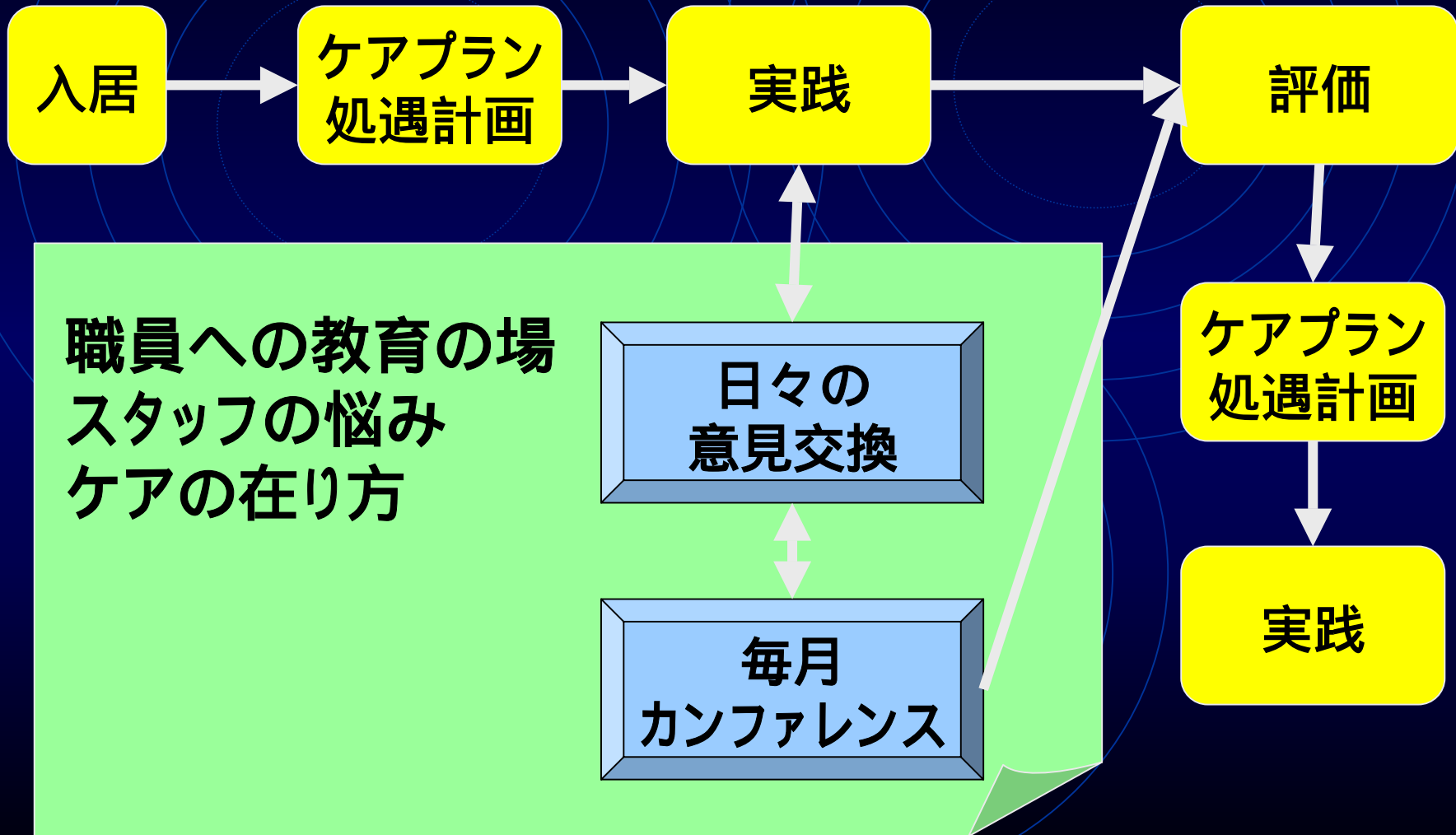
風景・開放感・他者との交流の機会を通して、
生活の活力に結びつける。

家事作業の風景



ご本人それぞれの持っている力を引き出せる様な
支援をする

入居からのケアの流れ



スタッフの悩み

他の入居者も見守りながらどう対応していけば良いのか？

どうしたらその方の不安を取り除けるのか？

スタッフも一人の人間である為、繰り返しの訴えやされらの症状に対しての心理的ストレスがあります。

結局、慰めてみたり...その場が安心できる言葉かけや、気分転換を図ることで、訴えの回避を試みていました。

ケアの在り方を振り返り

「その人らしい普通の生活とは何なのか？」

「“職員”という存在・役割とは何なのか？」

【事例紹介】

- 氏名：N.Mさん
(83歳、女性)
- 病名：アルツハイマー型痴呆症
- 痴呆度：
- HDS - R = 4点
- 要介護度：3です。

入居までの経過

- 平成 2 年 2 月頃より物忘れの痴呆症状出現
- 平成 1 2 年 2 月、夫が他界
痴呆症状が悪化と共に、在宅介護が困難
- 平成 1 2 年 1 1 月より府中市にある介護老人保健施設に入所
- 平成 1 3 年 2 月「つつじの夢」に入居

GH入居時



入居当初からの処遇について

- ・ 落ち着いた居室の空間作り
- ・ 生活ケア(自信と満足の寄与)
- ・ 団らんの場の設定
- ・ 他の入所者となじみの関係作り
- ・ 職員とのスキンシップやコミュニケーションを図る

入居6ヶ月目~の 処遇について

- 過度の気遣いや声かけを控える
- 職員が書いた手紙の回収
- 家系図等から詳しい生活史・個人史を探る
- 収集した情報を関わり（コミュニケーション）の中にを取り入れる

まとめ及び考察

- 現実と向き合い一緒に悩んだり、考えたり、思いおこせる様な関わりをもつ事、それが「普通の暮らし」
- 「その場限りの言葉や対応だけでは本当の解決にはならない」という事

GHの生活とは

- 家庭的な環境の中で、職員が提供して、生活を送って頂くのではなく、自らの意志で生活をするものだと感じます
- 私達職員は、常に生活しやすい環境を与えてあげるのではなく、生活に必要な作業を代行する事でもありません

GH職員としての存在・役割

- 「時に家族の一員となり、見守りながら陰で支える存在であり、時に専門性を発揮するであります。

GH職員としての必要な事

判断力・直感力・応用力・包容力・受容・忍耐力の介護技術を身につけ、意志や自主性を引き出しながら、今回の事例をとおて、生活を援助する中、あっという間に日が過ぎてしまいますが、職員が「GH職員として役割を認識し」「普通の生活を大切にする発想」重要視した関わり方を再確認しながら、常にケアの在り方を振り返る必要があると感じました。